

## 約 束

『この秋早々歸ります』と、數百年前、赤穴宗右衛門がその義弟丈部左門と別れる時、云つた。時は春、場所は播磨國加古村。赤穴は出雲の武士であつた、それで彼は郷里を訪れようと思つた。

丈部は云つた、――

『あなたの出雲、――八雲立つ出雲の國は甚だ遠い。それ故恐らく或定まつたお歸りの日を約束なさる事はむづかしいでせうが、もしその日が分つたら私共は幸に思ひます。さうしたら、私共は歓迎の宴の用意ができます。そしてお出でになるのを門に出て見張つて居られます』

『さあ、その事については』赤穴は答へた、『私は旅にはよく慣れて居るから、或場所に着くにはどれ程かかるか豫め云ふ事ができます、それで定まつた日にここへ着く事は安心して云へます。重陽の佳節ときめて置いてどうでせう』

『それは九月九日ですね』丈部は云つた、――『その頃は菊の花も咲くから、一緒に菊見もできます。愉快愉快。……それぢやお歸りは九月九日と約束して下さいますね』

『九月九日』赤穴は別れの微笑を見せながら、くりかへした。それから彼は播磨の國加古村から、

大勝に歩き出した、——そして丈部左門とその母は、眼に涙を浮べてそのあとを見送つた。

『月日に關守なし』と古い日本の諺は云ふ。速かに幾月か過ぎ去つた、そして秋——菊花の季節——が來た。そこで九月九日の早朝から、丈部は彼の義兄を歓迎する用意をした。品々の肴を調へ、酒を買ひ、客間を飾り、床の間の花瓶には二色の菊花を挿した。その時、これを見てゐた母は云つた、——『出雲の國はここから百里以上もあります。山を越えてそこから來る旅は苦しくて疲れませう、赤穴が今日來る事ができるかどうかは、あてにならない。そんなに骨を折らないで、來るのを待つてからにしてはどうかね』『いゝえ、母様』丈部は答へた——『赤穴は今日ここへ來ると約束しました、約束を破るやうな人ぢやありません。到着してから用意を始めるのを見たら、私達はあの人の言葉を疑つたと思ひませう、それが恥づかしい』

その日は美はしく、空には一點の雲もなく、空氣は澄み渡つて世界はいつもより千里も廣くなつたやうに思はれた。朝のうち、多くの旅人は村を通つた——武士も幾人かあつた、そして一人一人の通るのを見守つてゐた丈部は、度々赤穴が近づくのを見たやうに思つた。しかし寺の鐘が正午を知らせたが、赤穴は見えなかつた。午後も續いて丈部は見張つて待つて見たが無駄であつた。日は沈んだ、しかしやはり赤穴の來るやうすはなかつた。それでも丈部は門に立つて往來を眺めてゐた。やがて母は來て云つた、——『諺に云ふ通り——男の心は秋の空のやうに早く變る

事もあらう。しかし菊の花は明日も未だ鮮かであらうから、もう床についてはどうか、明朝になつてから、又赤穴を待ちたければ、待つ事にしては『母様、お休みなさい』丈部は答へた、——『しかし私はやはり來るとしか信じられません』それから母は寢室に行つて、丈部は門にためらつてゐた。

夜は晝のやうに澄んでゐた、空には一面に星が動いて、銀河は異様の光をもつて輝いてゐた、——静けさを破る物は、ただ小川の音とはるかに吠える犬の聲だけであつた。丈部はやはり待つた、——細い月が近くの山のうしろに沈むのを見るまで待つた。その時やうやく彼は疑ひ恐れ始めた。丁度家に戻らうとした時、彼は遠くからたけの高い人が——甚だ軽く、かつ速く、——近づいて來るのを見た、そして直ちにそれが赤穴である事を認めた。

『やあ』丈部は彼を迎へるために、跳び出して叫んだ、——『朝から今まで待つてゐました。……やはり約束を守つて下さつたね。……しかし兄様、あなたはきつと疲れたでせう、——入つて下さい、——何でも用意してあります』彼は客間の正座へ赤穴を案内して、急いで細くなりかけて居るあかりを直した。丈部は續けて云つた、『母は今晩少し疲れて居るのでもう寝ました。しかし、やがて起しませう』赤穴は頭を振つて、不承諾の身振をちよつと示した。『兄様、それではあなたの好きなやうに致しませう』と丈部は云つて、この旅客の前に暖い酒肴を置いた。赤穴は酒にも肴にも手を觸れないで、暫らく動かないで、黙つてゐた。それから、母を起す事を恐れるかのやうに、——ささやきの聲になつて、云つた、——

『こんなにおそく来るやうになつたわけを、これから云はねばならない。私が出雲へ歸ると、人は以前の君主鹽冶殿の厚恩を忘れて、あの富田城を取つた謀叛人の經久つねひさに媚を呈して居るのを見た。従弟の赤穴丹治が經久に仕へて、その家臣として富田の城内に住居して居るのを訪ねねばならなかつた。彼は私に經久の前に出るやうに勧めた、私は新しい君主の顔を見た事がないから、重にその人の性格を見るためにその勧めに應じた。經久は熟練なる軍師で、非常な勇氣があるが、狡猾で殘忍である。私はこの人に仕へる事は決してできない事を知らして置く事を必要と思つた。その面前を下ると、彼は私の従弟に命じて私を留めた、——家の中から私を出さないやうにした。私は九月九日に播磨へ歸る約束のある事を云ひ張つたが、出る事を許してくれなかつた。それで私は夜城から逃げ出さうと思つたが、たえず見張りがついてゐたので、たうとう今日まで約束を果す方法は見出せなかつた。……』

『今日まで！』丈部は驚いて叫んだ、——『城はここから百里以上もある』

『さうです』赤穴は答へた、『人は一日に百里を行く事はできない。しかし、約束を守らなければ私はよくは思はれない事を思つた、それから私は「魂よく一日に千里を行く」と云ふ古い諺を思ひ出した。幸にして私は刀を携ふる事を許されてゐた、——それでやうやく私は歸つて來る事ができた。……母上を大事にして下さい』

かう云つて、彼は立ち上つて同時に消えた。

その時丈部は赤穴が約束を果すために自殺した事を知つた。

未明に丈部左門は出雲の富田城に向つて出發した。松江に着いて彼はそこで九月九日に赤穴宗右衛門は城内の赤穴丹治の家で切腹した事を聞いた。それから丈部は赤穴丹治の家に行つて、丹治の信義のない事を責めて、家族の面前で彼を殺して、自分は怪我もしないで逃れた。それから經久がこの話を聞いた時、丈部を追はせないやうに命令を出した。即ち經久自らは亂暴な殘忍な人ではあつたが、外の人の信を愛する事を尊敬して、丈部左門の友情と勇氣を感嘆する事ができたからであつた。

(田部隆次譯)

*Of a Promise Kept. (A Japanese Miscellany.)*